

JASSO海外留学支援制度に参加して

歯学科6年 小松 貴紀

カナダへの留学を終えた翌月のクレジットカードの請求額を見て驚いた。しかし何度も確認したが、すべて自分がカナダで使ったお金であった。仕方ない。滞在・移動費だけならば、ほぼ奨学金で賄えたはずであった。自分のテンションが上がりすぎてカナダで使いすぎてしまったツケが回ってきたのだ。私のなけなしのお小遣いによってカナダの経済はかなり潤ったことであろう。

今回、私達はJASSO海外留学支援プログラムで奨学金を頂き、バンクーバー（カナダ）のブリティッシュコロンビア大学（UBC）に2週間ほど、同学年の小松万記さん、清水梨沙さんと共に派遣させていただいた。UBCはカナダでも3本の指に入るほど大きな大学で、世界の大学ランキングでも常に上位に位置する、非常に優秀な大学である。私たちは、現地の学生の4年生（カナダでは最高学年）が行う臨床実習や3年生の基礎実習（マネキン実習）を見学したり、授業やPBLに参加し、日本と海外の臨床の違いや歯学部教育の違いを体験する事ができた。現地の学生はアジアのみならず、中東やヨーロッパ等、様々な国からきており、日本が大好きな学生も多く、お昼には学食で一緒に日本トークをしながらランチを取ってもらえたり、放課後にディナーへ連れて行ってもらえたり、謎のクラブに誘われたりと、非常に丁寧に対応していただいた。

休日は基本的に自分たちだけで行動した。日頃の力関係からして、2か月前から旅行本を読みこんでいた女の子2人がほぼ旅行のプランを決め、私はそれに頷くだけであった。しかし、2人のプランはどれもとても楽しかった。キャピラノ渓谷という大きな谷にかかる揺れる吊り橋では、バンクーバーの大自然を堪能することができ、極度の

高所恐怖症である私は、はしゃいでわざと橋をゆらし私を恐怖に陥れる2人と今後うまくやっていたのか不安であった。また、スタンレーパークという滞在地近くの、一周約10キロもある広大な公園でサイクリングを満喫した。さらに、現地のツアーに申し込み、ヴィクトリアという都市へ行ったりした。

バンクーバーには、日本でいう寿司のような、その国の料理というものがない。かわりに、様々な国の料理店が立ち並ぶ。もちろん、日本料理屋も現地では大人気で、寿司屋さんはもちろん、「ebiten」という店名のうどん屋があったり、日本風のラーメン店では毎晩のように行列ができていた。中でも、私たちの心に残ったのは、「ギリシャ料理」である。日本ではあまり口にすることがないが、私たちはその中でも人気のあったsouvlaki（スーブラキ）という料理をいただいた。スーブラキとは、串焼きにした牛肉やラム肉のことで、私たちが訪れた人気のお店ではその他にサラダとバターライスがワンプレートになっており、人生で初めて味わうとともにそのおいしさに感動した。

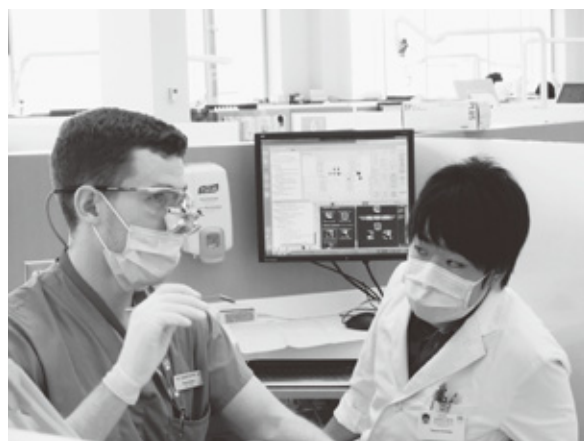
今回の派遣で現地の学生から学んだことは、英語が上達したことや、臨床の細かい技術などはもちろんだが、一番は彼らの実習のモチベーションの高さである。我々は臨床に出て間もない時期に短期留学へ行ったが、私の診療と比べて彼らは患者さんに対して堂々と自分の診療を行っていた。しかし、そのためには事前にその日行う診療をしっかりと勉強しておかなければならず、そのための準備を彼らは決して怠らない。また、1つ10万もする診療用の顕微鏡を1人1つ持参しており、意識の高さが伺えた。もし私がその顕微鏡を

使用していたら、周りから後ろ指をさされる事だろう。もし、みんなで共同購入しようと言えば、大バッシングを食らうだろう。しかし、彼らにとってみれば、最高の環境で最高の実習をするために、最高意欲と最高の道具をもって実習を行うことが当たり前となっている。私は自分の診療を振り返った時、自分の診療や準備にどこか甘い部分があり、堂々と自分の診療が行えない部分があった。同じ歯学部生なのに国が違うだけでここまで勉強の姿勢が違うことが少し悔しくて、日本に帰国し、私はせめて自分の診療や準備を怠らず、堂々と診療を行うことを心がけることにした。これが、学んだことの中で1番自分のなかで生きている事である。

大学に来て、学生のうちから経済的支援をうけて、短期留学ができるこのJASSO海外留学支援制度は最高のプログラムである。歯学部に来て、海外の歯学部や臨床を学生のうちから肌で感じることができ、海外の言語や文化、習慣も学ぶことができる。海外に行くことは、多くの人にとっては非常にハードルが高いことだろう。安全面や英語力とさまざまな不安があるだろうが、実際行ってしまえば全く問題にならない。奨学金を得て海外に行く素晴らしい機会があるのだから、学年は関係なくとにかくプログラムに参加することに意義がある。私は後輩のみなさんにはこのプログラムを利用して気軽な気持ちで海外へ行ってほしい。



左から清水梨沙さん、筆者、小松万記さん



現地の学生の診療介助

JASSO海外留学支援プログラム報告

～ペンシルバニア大学を訪ねて～

歯学科6年 山崎 恭子

5月16日より約2週間、日本学生機構(JASSO)のプログラムによりアメリカ・ペンシルバニア大学を訪問しました。ペンシルバニア大学はペンシルバニア州フィラデルフィアに本部を置く全米で4番目に古い大学で、アメリカで最初に医学部が設立された大学でもあります。歯科分野では特に歯内療法が有名な大学です。

訪問中は主に病院での診療見学を行いました。毎日異なる専門科の診療室を見学させてもらい、症例の説明を受けたり外科手術を見学したりしました。その中で特に印象に残ったのは感染症を保持する患者に対する診療です。新潟大学とは異なり、ペンシルバニア大学には感染症患者専門の診療室(oral medicine clinic)が存在します。ここではAIDSや肝炎をはじめとする様々な感染症や全身疾患を持つ患者に対して定期的なメンテナンスを行い、顔面・口腔領域のみならず全身状態の経過を観察しています。ドクターは血液検査結果など医科領域における患者のデータも広範に所持しており、患者の全身状態を詳細に把握し、診療に臨んでいました。普段臨床実習を行う中

で、歯科に関係のある全身疾患についてはよく調べて診療を行うようにしていましたがその他の全身疾患については基本的な知識しか持っておらず、自分がいかに勉強不足であるかを思い知らされました。

見学を行う中で日本とアメリカの診療の違いを最も大きく感じたことは、保険制度についてです。皆保険制度を採用していないアメリカでは治療費の安い大学病院に低所得層の患者さんが多く来院します。例えば根管治療の必要な齲蝕が存在した場合、患者さんは根管治療を行うか抜歯するかの二択を迫られます。そこで根管治療に必要な金額(約700\$ほどだそうです)が払えない場合は抜歯となってしまいます。低所得層の患者さんの多くは治療費が払えないため、明らかに保存可能な歯を抜歯することになるとのことでした。自分たちと同年代の女性の残存歯がすでに10本を切っている様子を見て残念に思うと同時に、日本の医療制度の充実を感じさせられました。

2週間のアメリカ滞在の中では、現地の文化に触れる機会も多々ありました。フィラデルフィア



左から筆者、飯田育葉さん、原さやかさん



診療風景

は独立宣言が採択されたアメリカ発祥の地であり、アメリカの歴史に関する建造物が多数存在します。アメリカ独立のシンボルと呼ばれるリバティーベルやフィラデルフィア美術館を見学し見聞を広め、合間にはマーケットやショッピングセンターでの買い物を楽しみました。

また、週末にはアムトラックでワシントンD.Cを訪れました。日帰りでの訪問だったので時間は十分とは言えませんでした。航空宇宙博物館と自然史博物館で様々な展示物を見学し、ホワイトハウスにも足を運びました。JASSO海外留学支援プログラムでアメリカの大学を訪問した場合、食事や休日の過ごし方などは自分たちで決める場合がほとんどです。慣れない英語でのコミュニケーションに悪戦苦闘しながらも、自分たちで計画を立て、公共の交通機関を利用して行動するということはとても良い経験になりました。

臨床実習の真っ只中でのJASSO海外留学支援プログラムの参加は可能なのか、申し込む前はもちろんのこと、出発直前にも大変悩みました。しかし2週間の滞在を終えて、参加して本当に良かったと思います。学生の中に海外の歯科医療の現状を知る機会というのは滅多にないことであり、意識の高い学生や先生方との触れ合いは大きな刺激となりました。臨床実習の最中であつたからこそ、診療見学を通して学ぶことは多かったように感じます。個人的には、引っ込み思案な性格を変える大きなきっかけにもなりました。

最後になりましたが、このような機会を与えてくださった魚島先生をはじめ、石田先生、快く送り出してくださった臨床実習ライターの先生方にこの場をお借りして感謝申し上げます。ありがとうございました。



留学担当のK'SHELLEと



フィラデルフィアの街並みと共に

JASSO海外留学支援プログラム 三大学合同派遣に参加して

歯学科6年 鈴木 麻里恵

今年の3月に初めてタイ（コンケン大学）への短期留学に参加させていただきました。私が参加したプログラムは、今回初めて実施された三大学合同派遣でした。これは、東北大学、広島大学、新潟大学が連携し、より高度な歯学部教育を目指す事業の一環として行われたものでした。滞在期間は11日間で、東北大学から6人、広島大学から3人、新潟大学から6人の学生が参加しました。ここから私が体験したことについて、項目別に述べていきたいと思います。

①留学プログラムについて

コンケン大学でのプログラムは病院見学が主体で、そこにコンケン大学ツアーや開業歯科医院の見学、ワールドカフェなどが組み込まれていました。コンケン大学の病院は日本とは全く違う雰囲気でした。暑い気候からなのか、全体的に開放的なつくりになっていて、患者さんが裸足で歩いていたのが驚きでした。どの診療科においても学生が実習していて、先生のみならず学生たちがいろいろと説明してくれました。開業歯科医院は大学

病院と違ってかわり、2階建のとてもおしゃれな建物で、ホテルのロビーのような待合室があったことが印象的でした。ワールドカフェとは、グループを3つ作って議題について意見し合う討論会で、みんなでタイ滞在で学んだことを共有しました。

②タイでの生活について

コンケン大学の学生はみんなフレンドリーで親切で、いつも私たちのことを気にかけてくれました。さらに彼らの英語はとても分かりやすかったので、英語が苦手な私でもなんとかコミュニケーションを取ることができました。毎晩ご飯に連れていってくれたり、買い物につれていってくれたり、まるで現地の学生のように過ごすことができました。食べ物やビールはおいしいし、気候に関しても信じられないほど暑いわけでもなく、快適な生活を送ることができました。

③タイと日本の違いについて

タイと日本の大きな違いは、臨床実習の内容だ



コンケン空港にて



ソーラン節披露

と思います。コンケン大学では臨床実習は4年生から始まり、ミニリクも私たちの2倍3倍もありました。これは、タイの歯科医師不足問題が理由と考えられました。即戦力となる歯科医師を育成するため、大学のうちから多くの症例を経験させる方針のようです。英語教育も充実していて、授業やカルテ記載はほぼ英語が使われていました。そのため、タイの学生は日常生活においてだけでなく、診療内容についても英語でスラスラと説明することができていました。

④三大学間の違いについて

三大学間でも異なる点が多々ありました。新潟大学の強みは、診療参加型の臨床実習だと思いません。他の大学はやはり見学することが多いようで、うらやましがられました。東北大学は研究が盛んで、学生のうちから研究室に足を運ぶ人が多いようです。広島大学は英語教育に力を入れていて、英語を使った授業が行われていたり、留学に

参加する学生も多いようです。同じ日本国内の大学でも様々なところに違いが見られ、改めて自大学の長所に気づくことができました。

私がこの短期留学に参加したいと思ったきっかけは、海外で友達を作れたらいいなという思いと、さらに日本の他大学の学生とも交流できたら、人数も多くなって楽しそうだなという漠然としたものでした。そのような軽い気持ちから始まったのですが、予想した以上のことを学び、感じるすることができました。このプログラムが他のプログラムと異なることは、三大学が参加しているので、所々で自分の大学と他の大学を比較したり意見を言い合ったりすることができたことです。

たくさんの人と出会い、とても良い刺激を受けました。今の自分に満足せず、もっと上を目指していけるように努力したいと思いました。このような貴重な経験をさせて頂きありがとうございました。



新潟大学メンバー



病院見学